

縄文時代亀ヶ岡文化における剥片石器の地域性 —津軽・今津遺跡および下北・不備無遺跡の剥片石器の比較—

青森県の石器研究の問題点と課題

青森県内の石器研究の現状を、日本の石器研究の動向と比較すると、いくつかの問題点が浮かび上がってくる。

第一に、近年の石器研究では、資料を集成・整理してそのパターンを把握するという段階から多様な理論や方法論を組み合わせる人間行動や社会などの問題に接近するという研究段階へいたっているのに対し、青森県の石器研究はいまだに資料を集成・整理してそのパターンを把握するという段階から抜け出せていない。青森県内の遺跡の発掘報告書を一見してみても、石器の項目では器種分析や石器組成の結果はあるのだが、周辺の遺跡との比較などが行われておらず、その遺跡の特徴や位置づけがわからないものが多い。

第二に、青森県内の石器に関する論文は、翡翠大珠や黒曜石などの交易に用いられたとされる石器や、祭祀に用いられたとされる石器の分析を行っているものは多いが、普段の生活に用いられた石器の詳しい分析例が少なく、その実態がよくわかっていない。これらの分析を行い、縄文時代における青森県内の実態を解明することが、他の文化圏との関係を解明するためにも重要である。

青森県内の縄文時代の石器に関しては実体のわかっていないことが多くあるが、今回の研究では、縄文晩期の津軽半島の剥片石器と下北半島の剥片石器の詳しい分析を通して、実体のわかっていない縄文時代晩期の亀ヶ岡文化における剥片石器の地域差について解明していきたい。

研究の目的

今回の研究の第一の目的は、津軽半島に所在する今津遺跡（外ヶ浜町）と下北半島に所在する不備無遺跡の剥片石器の分析を通して、津軽半島と下北半島の縄文時代晩期亀ヶ岡文化における剥片石器の地域差を解明することである。

第二に、2009年に弘前大学で発掘調査された不備無遺跡の石器の分析を通して、未だ実体がよくわかっていない下北半島の縄文晩期の石器の様相を解明することである。さらに、不備無遺跡は層位的な検出が成功しており、層位にもとづいて石器を分析することができる。層位にもとづく分析によって、下北半島の縄文晩期における石器の様相の変遷を追うことができるかと期待される。

分析対象遺跡・遺物

分析対象となる遺跡は、青森県外ヶ浜町に所在する、縄文晩期の遺跡である今津遺跡と、青森県むつ市に所在する、縄文晩期の遺跡である不備無遺跡である。分析対象とした遺物は、異形石器や石製品などの石器を除く剥片の定型石器（石鏃・尖頭器・石匙・石錐など）、刃器、素材剥片、石核である。

今津遺跡の遺物は、2002年に弘前大学で発掘調査された際に出土したものを対象とする。

今津遺跡出土の分析対象遺物の時期は、すべて縄文晩期中葉（大洞 C2 式）とする。

不備無遺跡の遺物は、2009 年に弘前大学で発掘調査された際に出土したものを対象とする。分析対象遺物の時期は、第 2 層から出土したものは縄文時代晩期後葉とし、第 3 層から出土したものは縄文時代晩期前葉とする。

研究の方法

石器の分類方法や計測方法は、町田勝則氏の論文にもとづいている（町田 2002）。研究方法は主に第 4 段階からなる。第 1 段階は、対象となる遺物をそれぞれの器種に分類することである。刃器は、素材剥離に二次剥離による刃部形成が確認できるものをスクレイパーとし、刃部形成は確認されないが、縁辺部に使用による微小剥離痕が確認できるものは使用痕のある剥片とした。素材剥片は、打点を上にしたときに、全体形が縦長になるものを縦長剥片、全体形が横長になるものを横長剥片とした。第 2 段階は器種ごとに法量や側辺部形態などの属性をデータ化し、属性表を作成することである。第 3 段階は遺物の図化である。今回は定型石器のみ図化した。第 4 段階は属性表に基づく分析である。分析は器種・器種組成・製作技術の面から行った。

分類基準は、今津遺跡と不備無遺跡の遺物の比較をメインとしているために、分類基準を統一して行っている。不備無遺跡の分析の際には、石器の時期差を解明するために第 2 層と第 3 層で分けて分析していることが多い。

分析結果

(1) 今津遺跡

分析対象の遺物は合計 2189 点である。その内訳は、定型石器が 55 点、スクレイパーが 122 点、使用痕のある剥片が 445 点、縦長剥片（素材となる剥片）が 778 点、横長剥片（素材となる剥片）が 646 点、石核が 143 点である。また、定型石器の内訳は石鏃 23 点、尖頭器 16 点、石錐 7 点、石匙 5 点、石篋 4 点である。

(2) 不備無遺跡

分析対象の遺物は合計 1882 点である。その内訳は、定型石器が 63 点、スクレイパーが 343 点、使用痕のある剥片が 623 点、縦長剥片（素材となる剥片）が 450 点、横長剥片（素材となる剥片）が 379 点、石核が 22 点である。また、定型石器の内訳は石鏃 21 点、尖頭器 3 点、石錐 4 点、石匙 32 点である。石篋は出土していない。また、2 層（大洞 A・A' 主体）の定型石器の内訳は、石鏃 8 点、尖頭器 1 点、石錐 2 点、石匙 9 点である。一方、3 層（大洞 B・BC 主体）の定型石器の内訳は、石鏃 12 点、尖頭器 1 点、石錐 1 点、石匙 18 点である。

(3) 組成の比較

今津遺跡と不備無遺跡の石器全体の組成を比較したとき、2 点大きな違いが見出される。第一に、組成に占める、刃器の割合の違いである。今津遺跡の刃器の割合が約 2.5 割であるのに対し、不備無第 2 層における刃器の割合は約 4 割、第 3 層における刃器の割合は約 5

割をしめる。また、その内訳をみてみると、不備無遺跡第 2 層では、スクレイパーと使用痕のある石器はほぼ同じ割合なのに対して、今津遺跡はスクレイパーの割合が極端に少ない。不備無遺跡第 3 層では、第 2 層と比較するとスクレイパーの割合は小さいが、それでも刃器全体の 3 分の 1 程度を占める。今津遺跡では剥片をそのまま加工せずに刃器として用いることが多かったと推定される。第二に、素材剥片の割合である。今津遺跡と不備無第 2 層の素材剥片の割合はともに 6 割程度であるが、不備無第 3 層の素材剥片の割合は約 5 割と、前者よりも少ない。三者とも、縦長剥片の方がわずかに多いようだが、横長剥片と縦長剥片の割合はほぼ同じである。

次に、今津遺跡と不備無遺跡の定型石器の組成を比較したとき、3 点大きな違いが見出される。第一に、石鏃と尖頭器の割合である。今津遺跡では不備無遺跡に比べると、尖頭器がわりと多く出土している。第二に、石鏃・尖頭器と石匙の割合の違いである。今津遺跡は組成の約 7 割を石鏃と尖頭器でしめるが、石匙の割合は 1 割程度にすぎない。一方、不備無遺跡では、第 2 層・第 3 層ともに組成に占める石匙の割合は、石鏃と尖頭器の割合よりも大きい。第三に、石筥の割合である。今津遺跡から出土している石筥は、不備無遺跡からは出土していない。不備無遺跡では石匙の出土量が多いので、石匙が石筥と同等の機能を持ち合わせていた可能性がある。両遺跡の共通点としては、石錐の出土数が少ないことがあげられる。

また、出土数の似ている今津遺跡と不備無遺跡の石鏃の組成を比較したとき、2 点大きな違いが見出される。第一に、今津遺跡で 25% を占める無茎鏃の割合が、不備無遺跡では極端に少ないという点である。第二に、今津遺跡で 25% を占める平基有茎鏃が、不備無遺跡では 1 点しか出土していないという点である。

考察：今津遺跡と不備無遺跡の剥片石器の特徴

(1) 今津遺跡の剥片石器の特徴

今津遺跡の剥片石器の特徴は以下の 2 点である。

第一に、定型石器の石器組成において、石鏃や尖頭器などの狩猟具の割合が大きいということである。この点に関しては、弘前大学での調査以前に青森県埋蔵文化財センターで行った、今津遺跡の発掘調査の際に出土した剥片石器の組成とも一致し、同遺跡における大きな特徴であるといえる。

第二に、不備無遺跡の石鏃に比べて、平基有茎鏃の割合が大きいという点である。

(2) 不備無遺跡の剥片石器の特徴

① 不備無遺跡全体の剥片石器の特徴

第一に、定型石器全体に占める石匙の割合が大きく、石筥が出土していないという点である。同時期の青森県内の遺跡の石器組成を見てみると、組成に占める石匙の比率が半数近い遺跡はほかにない。それでいて、他の遺跡では出土している石筥が出土していないということは、同遺跡では石匙が他の遺跡における石筥と同じような役割を担っていた可能性を指摘できる。このことに関しては、今後同遺跡の石匙の詳細な使用痕分析等から解明

できると考える。

②第2層と第3層における剥片石器の特徴の比較

第2層と第3層の剥片石器の大きな違いは、以下の3点があげられる。

第一に、石器組成における、刃器と素材剥片の割合の違いである。第2層では素材剥片の割合が刃器よりも大きいのに対し、第3層では素材剥片と刃器の割合はほぼ同じである。

第二に、定型石器の組成における、石匙の割合である。石匙の定型石器全体に占める割合が大きいことは先にも述べたが、第2層に比べると、第3層の方がより定型石器全体に占める石匙の割合が大きい。

第三に、石鏃・石匙の細分ごとの組成が異なるという点である。第2層と第3層の石器組成は、他の地域の組成に比べれば似ている方だが、器種の細かい内容はかなり異なるようである。

以上のことをまとめると、第3層において、石匙をふくむ刃器の石器組成に占める割合が第2層よりも大きいことが、最も大きな特徴であるといえる。大洞A式期になると、環境や生活の変化等によって刃器の需要が減るのかもしれない。また、先に述べたように、今津遺跡においても、大洞A式土器が包含されるブロックでの石器組成は同遺跡の大洞C2式土器が包含されるブロックでの石器組成と異なることから、津軽地域とともに下北地域でも、大洞A式期に環境や社会の変化があった可能性を指摘できる。

今後の課題

今回の分析において、最も困難だったのが、定型石器の細分別の細かい分析である。その理由は、第一に、個体数が少なく、今津遺跡と不備無遺跡で出土個体数が大きく違うという点である。特に石匙は、不備無遺跡では34点出土しているのに対し、今津遺跡では4点しか出土していない。このことは、それぞれの遺跡の特徴を裏付けるという点では大きな意味をもつが、各器種間で比較するときは困難であった。また、ある程度数の出ている石鏃に関しても、欠損等によって全体の法量が出せず、器種別の細分程度で終わってしまった。今後は、青森県内の縄文晩期の遺跡から出土した遺物を、器種ごとに集成・分析・比較することで、津軽半島と下北半島の地域差についてもっと深く解明できるものと考えられる。

参考文献

鈴木道之助 1991 『図録・石器入門事典〈縄文〉』 柏書房

弘前大学人文学部日本考古学研究室 2005 『青森県東津軽郡平舘村今津遺跡発掘調査報告書—津軽半島東沿岸部における亀ヶ岡文化の遺跡—』 (弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告 2)

町田勝則 1996 「石器の研究法—報告文作成に伴う観察・記録法①—」 『長野県の考古学』 (財) 長野県埋蔵文化財センター研究論集 I . pp.139 - 171